

BDDによる実装が可能な 様相論理の充足可能性判定手続き

田辺良則 (産総研/JST) 高橋孝一 (産総研)
山本光晴 (千葉大) 佐藤貴洋 (東大)
戸沢晶彦 (日本IBM) 萩谷昌己 (東大)

PPL2005

2005年3月9日

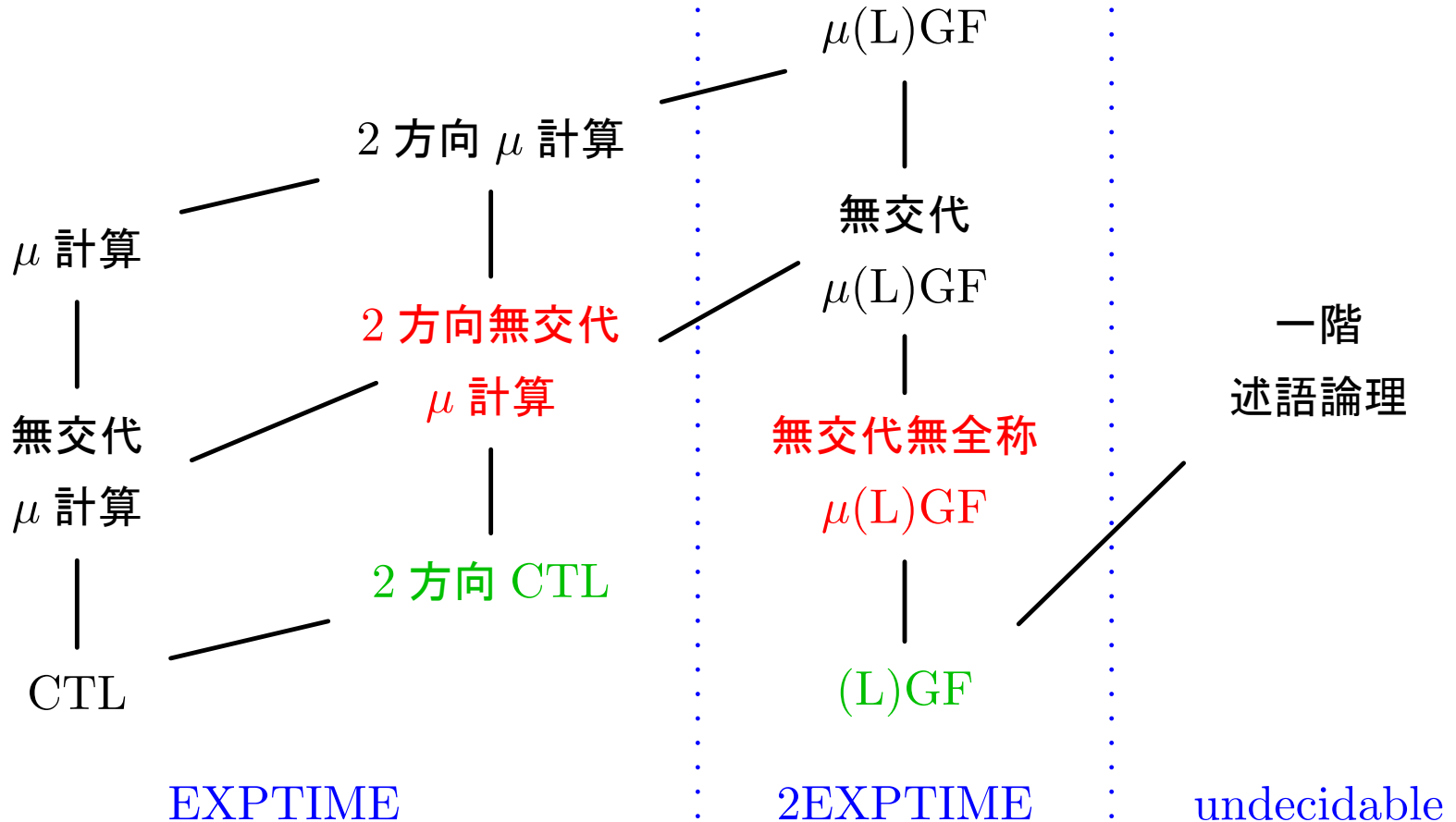
背景

- 論理式の充足可能性判定手続きの応用
 - ー 並行プログラムの合成
 - ー モデル検査における自動抽象化
- 時相論理式の充足可能性判定:
グラフ書き換え系への応用
 - ー XML 文書の検証
 - ー セルオートマトンの解析
 - ー ヒープ構造の検証
- 2方向の様相が必要

先行研究

- 対象の体系: とともに 2 方向の様相を持つ .
 - 2 方向 CTL
 - 一階述語論理の (Loosely) Guarded Fragment
- タブロー法による充足可能性判定手続き
- BDD による効率的な実装

論理体系の関係



概要

論理式の充足可能性判定手続き：2方向様相 μ 計算とその部分体系

体系	手法	実装
2方向様相 μ 計算	Alternating Tree Automaton	報告なし
無交代 2方向様相 μ 計算	タブロー法	BDD による効率的な実装 (?)
2方向 CTL	タブロー法	BDD による効率的な実装

注：問題の複雑さは、どれも EXPTIME 完全。

論理式の充足可能性判定手続き：不動点つき (μ) 一階述語論理の
 (弱) ガード付フラグメント ((Loosely) Guarded Fragment) と
 その部分体系

体系	手法	実装
$\mu(L)GF$	Alternating Tree Automaton	報告なし
無交代 $\mu(L)GF$??	??
無交代無全称 $\mu(L)GF$	タブロー法	BDD による効率的な実装 (?)
(L)GF	タブロー法	BDD による効率的な実装

注：問題の複雑さは，どれも 2EXPTIME 完全．

2方向様相 μ 計算

- Prop: 命題変数の集合
- Mod: 様相の集合
- 逆様相: $\bar{} : \text{Mod} \rightarrow \text{Mod}, \bar{\bar{a}} = a.$
- L_μ : 2方向様相 μ 計算 (two-way modal μ calculus) 論理式の集合:
 - 命題変数 P , その否定 $\neg P$.
 - 論理演算子 $\varphi_1 \vee \varphi_2, \varphi_1 \wedge \varphi_2.$
 - 演算子 $\langle a \rangle \varphi, [a] \varphi$ ($a \in \text{Mod}$).
 - 最小不動点演算子 $\mu X \varphi$, 最大不動点演算子 $\nu X \varphi.$
($X \in \text{Prop}$. $\neg X$ は φ に現れない.)

無交代性

$\varphi \in L_\mu$ が , 無交代 (alternation-free) $\stackrel{\text{def}}{\iff}$

- φ 中の μX の内側の νY の内側に X は現れない .
- φ 中の νX の内側の μY の内側に X は現れない .

例:

- $\mu X(\nu Y(P \wedge [a]Y \wedge [\bar{a}]X))$: NG.
- $\mu X(\nu Y(P \wedge [b]Y) \vee \langle a \rangle X \vee \langle \bar{a} \rangle X)$: OK.

下は , 2 方向 CTL 論理式の $E_{a,\bar{a}}F A_b G P$ に相当する .

無交代な L_μ の論理式全体を L_μ^{af} と書く .

意味論

Kripke 構造 $\mathcal{M} = (M, R, \lambda)$

- $a \in \text{Mod}$ に対して $R(a) \subseteq M \times M$, $R(\bar{a}) = R(a)^{-1}$.
- $P \in \text{Prop}$ に対して $\lambda(P) \subseteq M$.

$m \in M$ に対して $\mathcal{M}, m \models \varphi$ を定義

- $m \models P \iff m \in \lambda(P)$.
- \neg, \wedge, \vee は省略 .
- $m \models \langle a \rangle \varphi \iff m' \models \varphi$ for some $(m, m') \in R(a)$.
- $m \models [a] \varphi \iff m' \models \varphi$ for all $(m, m') \in R(a)$.
- $m \models \mu X \varphi \iff m \in \text{lfp}(\varphi, X)$.
- $m \models \nu X \varphi \iff m \in \text{gfp}(\varphi, X)$.

ただし, $\text{lfp}(\varphi, X)$ と $\text{gfp}(\varphi, X)$ は, おのこの, $S \subseteq M$ に $\{m \in M \mid \mathcal{M}[X \mapsto S], m \models \varphi\}$ を対応させる関数 (これは単調関数) の最小不動点と最大不動点 .

展開

μ, ν 演算子は「展開定義」の導入とみなせる．ただし， μ の展開は有限回． ν の展開は無限回．

例: $\varphi = \mu X_1(\nu Y_1(P \wedge [b]Y_1) \vee \mu X_2(\langle a \rangle X_1 \wedge [c]X_2))$

\Rightarrow

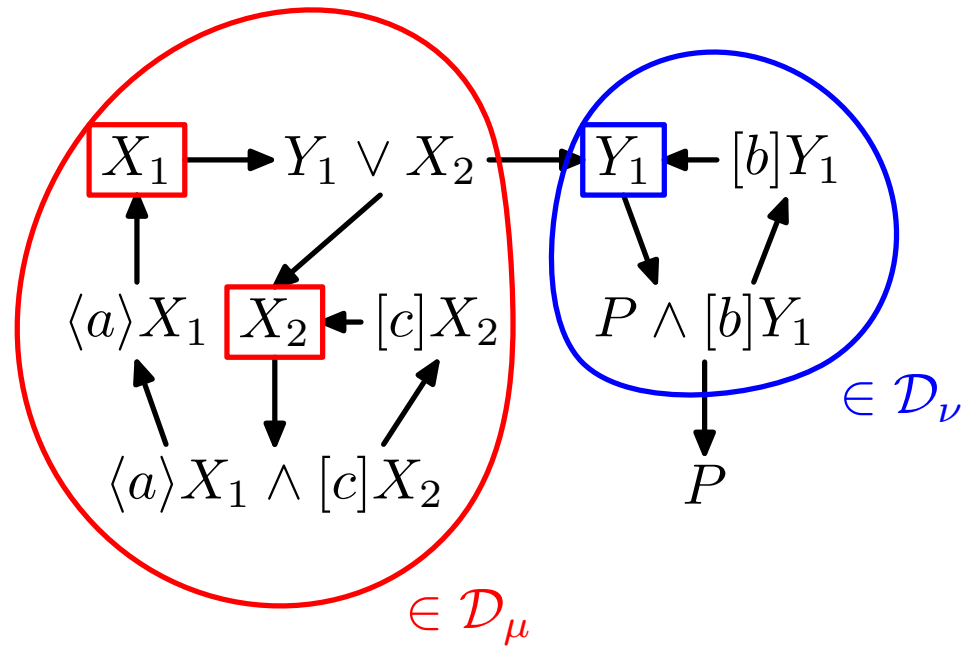
$$\varphi = X_1$$

ただし，

$$X_1 =_{\mu} Y_1 \vee X_2,$$

$$Y_1 =_{\nu} P \wedge [b]Y_1,$$

$$X_2 =_{\mu} \langle a \rangle X_1 \wedge [c]X_2.$$



展開定義: $X_1 =_{\mu} \xi_1, \dots, X_k =_{\mu} \xi_k$; $Y_1 =_{\nu} \eta_1, \dots, Y_l =_{\nu} \eta_l$

関係 \rightarrow_e :

$$\varphi_1 \vee \varphi_2 \rightarrow_e \varphi_i \quad (i = 1, 2) . \quad \varphi_1 \wedge \varphi_2 \rightarrow_e \varphi_i \quad (i = 1, 2) .$$

$$\langle a \rangle \varphi \rightarrow_e \varphi . \quad [a] \varphi \rightarrow_e \varphi .$$

$$X_i \rightarrow_e \xi_i \quad (i = 1, \dots, k) \quad Y_i \rightarrow_e \eta_i \quad (i = 1, \dots, l)$$

φ を含み, \rightarrow_e について閉じた最小の集合を $\text{cl}(\varphi)$ と書く .

φ が無交代 $\iff \text{cl}(\varphi)$ の \rightarrow_e に関する強連結成分で, X_i と Y_j の両方を含むものはない .

X_i を含む強連結成分の集合を \mathcal{D}_{μ} とする .

Y_j を含む強連結成分の集合を \mathcal{D}_{ν} とする .

φ_I 型

$\varphi_I \in L_\mu^{\text{af}}$ について, $\mathcal{M}, m \models \varphi_I$ となる \mathcal{M}, m が存在するかどうかを判定する手続きを与える.

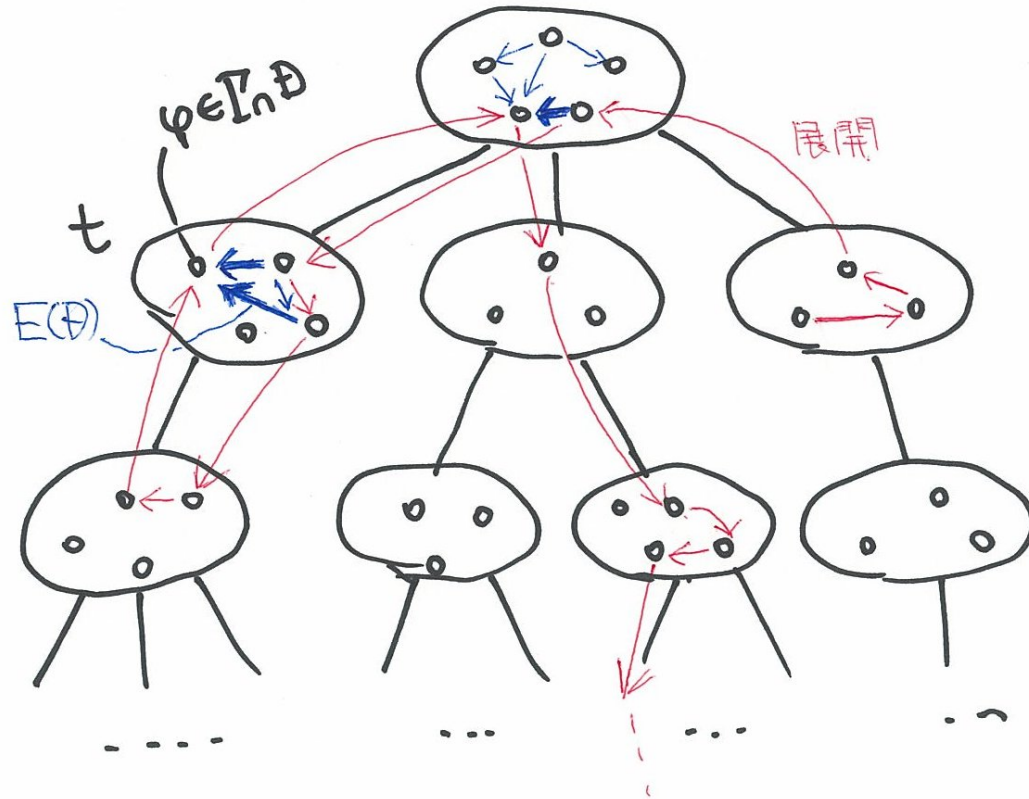
以下を満たす三つ組 $t = (\Gamma, E, f)$ を φ_I 型という.

- $\Gamma \subseteq \text{cl}(\varphi_I)$.
- E は \mathcal{D}_μ 上の関数で, 各 $D \in \mathcal{D}_\mu$ に対して $E(D)$ は D 上の非反射的, 推移的 2 項関係.
- f は関数. 定義域は, Γ の要素のうち $\varphi_1 \vee \varphi_2$ の形のもの. $f(\varphi_1 \vee \varphi_2) = \varphi_1$ または φ_2 .

- $\varphi_1 \vee \varphi_2 \in \Gamma$ ならば , $f(\varphi_1 \vee \varphi_2) \in \Gamma$. さらに
 $f(\varphi_1 \vee \varphi_2) \in D \in \mathcal{D}_\mu$ ならば ,
 $(\varphi_1 \vee \varphi_2, f(\varphi_1 \vee \varphi_2)) \in E(D)$.
- $\varphi_1 \wedge \varphi_2 \in \Gamma$ ならば , $\varphi_j \in \Gamma$ ($j = 1, 2$) . さらに ,
 $\varphi_j \in D \in \mathcal{D}_\mu$ ならば ,
 $(\varphi_1 \wedge \varphi_2, \varphi_j) \in E(D)$ ($j = 1, 2$) .
- $X_i \in \Gamma$ ならば , $\xi_i \in \Gamma$. さらに , $X_i \in D \in \mathcal{D}_\mu$ ならば , $(X_i, \xi_i) \in E(D)$.
- $Y_i \in \Gamma$ ならば , $\eta_i \in \Gamma$.

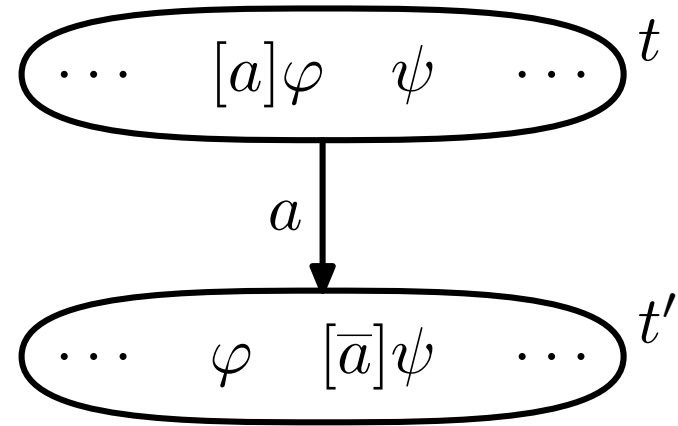
充足可能性判定手続き：方針

- 2方向様相 μ 計算は，木モデル性を持つ．
- φ_I 型が，木の形状に並べられるかどうかを調べる．



- 隣り合う $(t \rightarrow_a t')$ 条件

- $[a]\varphi \in \Gamma$
 $\implies \varphi \in \Gamma'$
- $[\bar{a}]\varphi \in \Gamma'$
 $\implies \varphi \in \Gamma$



- 木のノードになり得ないものを排除していく .

- $P, \neg P \in \Gamma$ (矛盾)
- $\langle a \rangle \varphi \in \Gamma$ なのに ,
 $t \rightarrow_a t'$ で $\varphi \in \Gamma'$ となるものがない . (\diamond 矛盾)
- $\varphi \in D \in \mathcal{D}_\mu$ なのに ,
 φ の展開が有限回で終わらない . (μ 矛盾)

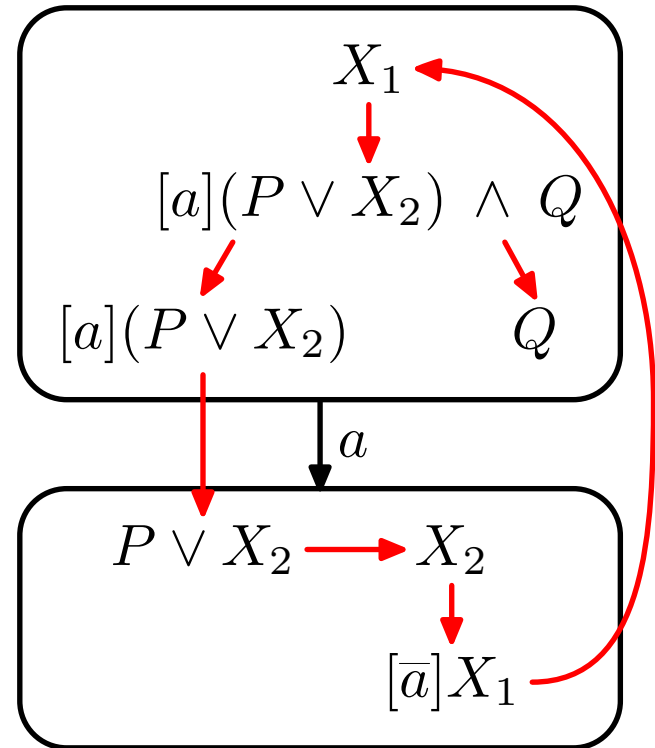
展開の有限性

$\varphi \in D \in \mathcal{D}_\mu$,

$t = (\Gamma, E, f)$: φ_I 型 .

$(\varphi, t) \in D$ の「1回の展開」:

- $\varphi = \varphi_1 \vee \varphi_2$ のとき ,
 $(f(\varphi), t)$.
- $\varphi = \varphi_1 \wedge \varphi_2$ のとき ,
 (φ_1, t) および (φ_2, t) .
- $\varphi = X_i$ のとき , (ξ_i, t) .
- $\varphi = \langle a \rangle \psi$ または $\varphi = [a] \psi$
のとき , $t \rightarrow_a t'$ または
 $t' \rightarrow_{\bar{a}} t$ なる t' に対して ,
 (ψ, t') .



$\varphi \in D$ の展開の列が

- $\varphi_1 \wedge \varphi_2$ と $[a]$ のときには，どのように展開を選んでも，
- $\langle a \rangle$ のときには，うまく展開を選べば，

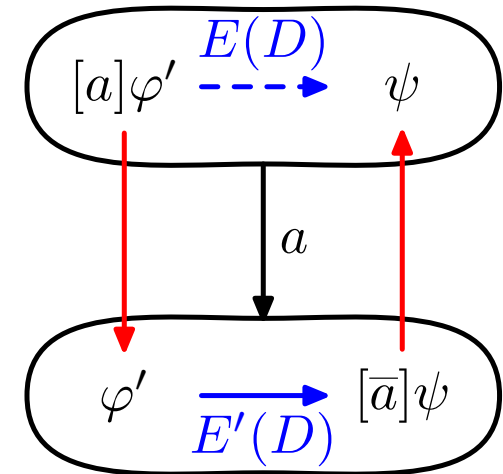
有限となるようにしたい．そのために，

- ループを起こさない．— E を使う．
- 枝を下に伸びる無限の展開がないようにする．

ループの排除

- $(\varphi, \psi) \in E(D)$
 \iff 「 φ を展開して ψ にすることを許す」
- $E(D)$ は 推移的 非反射的 .
- φ_I 型が隣接する $(t \rightarrow_a t')$ 条件を追加:
 $[a]\varphi', \psi \in D \cap \Gamma, \varphi', [\bar{a}]\psi \in D \cap \Gamma'$ とするとき ,

- $(\varphi', [\bar{a}]\psi) \in \overline{E'(D)}$
 $\implies ([a]\varphi', \psi) \in \overline{E(D)}$
- $(\psi, [a]\varphi') \in \overline{E(D)}$
 $\implies ([\bar{a}]\psi, \varphi') \in \overline{E'(D)}$



ただし , $\overline{E(D)} = E(D) \cup \{(\varphi, \varphi) \mid \varphi \in D\}$

下方への展開

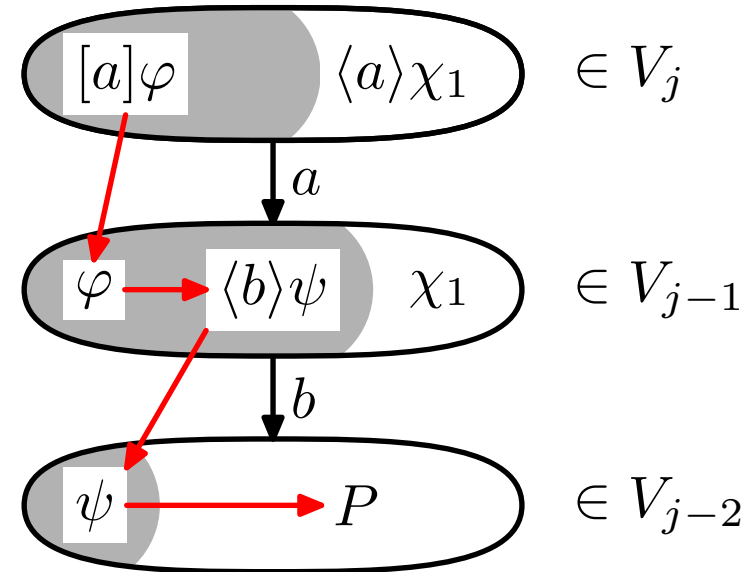
T : φ_I 型の集合, $t = (\Gamma, E, f) \in T$

$S \subseteq \Gamma \cap D$: \vee, \wedge, X_i の展開について閉じている.

(t, S) たちの集合 $V_0 \subseteq V_1 \subseteq \dots$ を作る.

$(t, S) \in V_j$ の気持ち: 「各 $\varphi \in S$ について, (φ, t) の展開で, $[a]$ と $\langle a \rangle$ はたかだか j 回しか現れない。」

- $(t, S) \in V_0 \iff S = \emptyset$
- $(t, S) \in V_{j+1} \iff$
 各 $\chi = \langle a \rangle \chi' \in \Gamma$ に対し
 て $(t', S') \in V_j$, $t \rightarrow_a t'$
 なる t' があって ,
 - $\varphi = [a]\varphi' \in S \implies$
 $\varphi' \in S'$.
 - $\chi \in S \implies \chi' \in S'$.



$(V_j \mid j < \omega)$ は , 有限集合 $T \times \mathcal{P}(\text{cl}(\varphi_I))$ の部分集合の包含関係に関する上昇列なので , どこか J で止まる .

t が μ 無矛盾 $\stackrel{\text{def}}{\iff} (t, \Gamma \cap D) \in V_J$

充足可能性判定手続き

- $T_0 = \{t \mid t \text{ は矛盾しない } \varphi_I \text{ 型}\}$.
- $T_{k+1} = \{t \in T_k \mid t \text{ は } T_k \text{ で } \diamond \text{ 無矛盾かつ } \mu \text{ 無矛盾}\}$.

$(T_k \mid k < \omega)$ は, 有限集合の, 包含関係に関する下降列なので, どこか K で止まる.

φ_I が充足可能

$\iff \varphi_I \in \Gamma$ なる $t = (\Gamma, E, f) \in T_K$ が存在する.

この判定手続きの計算量は EXPTIME . なお, 充足可能性問題の複雑さは, EXPTIME 完全である.

GF

Var: (一階の) 変数の集合

PS: 二階の変数 (i.e. 述語記号) の集合

GF: 一階述語論理のガード付きフラグメント (Guarded Fragment)

- 限量子は, 常に $\exists \vec{x}(\alpha \wedge \varphi)$, $\forall \vec{x}(\alpha \rightarrow \varphi)$ の形 .
これらを $\exists \vec{x}:\alpha. \varphi$, $\forall \vec{x}:\alpha. \varphi$ と書く . α をガードという .
- α は原子論理式 (述語記号の後ろに変数を並べたもの)
- $\text{free}(\varphi) \subseteq \text{free}(\alpha)$, $\vec{x} \subseteq \text{free}(\alpha)$

例: (P, Q, R, S は述語記号 .)

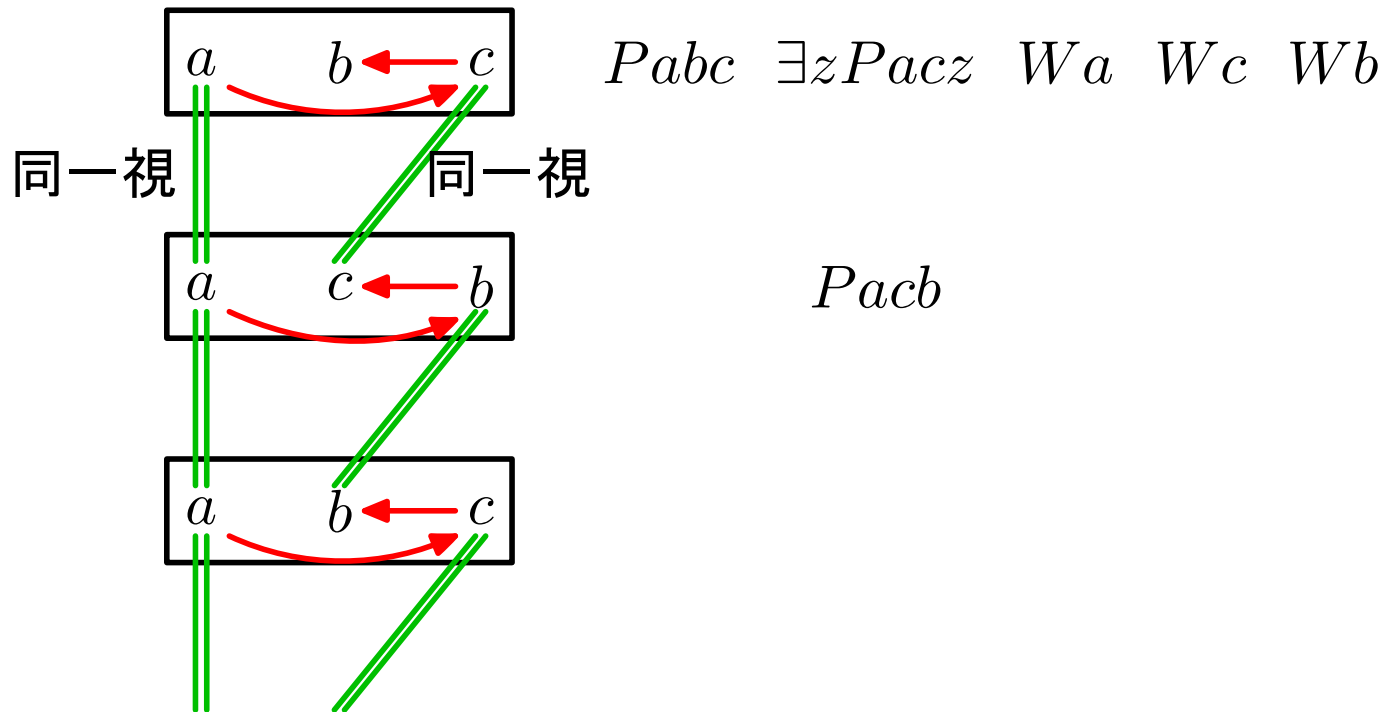
- $\exists x : Px . \forall yz : Qxyz . Rxz : \text{OK}$
- $\exists x : \neg Px . \forall yz : Qxyz . Rxz : \text{NG}$
- $\exists x : Px . \forall yz : (Qxyz \wedge Sxyz) . Rxz : \text{NG}$
- $\exists x : Px . \forall yz : Qyz . Rxz : \text{NG}$
- $\exists xy : Px . \forall z : Qxyz . Rxz : \text{NG}$

μ GF

- GF に不動点演算子が入る .
- 例
 - (標準書式): $(\text{LFP}_{W,w}(Pw \vee \exists y: Rwy. Wy))(x)$
 - (展開書式): Wx ,
where $Ww =_{\text{LFP}} Pw \vee \exists y: Rwy. Wy$
 - これは , 様相 μ 計算の $\mu X(P \vee \langle r \rangle X)$ に相当 .
- W は , ガードには使えない .
- 2 方向様相 μ 計算論理式は , μ GF 論理式に翻訳可能 .
($r \in \text{Mod}$ を Rxy で表現したとき , \bar{r} は , Ryx で表現される .)
- 様相 μ 計算と同様に , 「無交代」が定義される .

拡張木モデル性

例: $(\forall xyw: Pxyw. \exists z: Pxz. \top) \wedge (\exists xyz: Pxyz. Wx)$,
 where $Ww =_{\text{LFP}} (\forall yz: Pwyz. Wz) \wedge (\forall xy: Pxyw. Wy)$



充足可能性決定手続き？

無交代 μ GF でも無交代様相 μ 計算と同様に充足可能性が判定できるか？

⇒ うまくいかない．

- 様相 μ 計算: $\mu X\varphi$ が成り立つ証拠 (witness) が, 有限木になる．
- μ GF: $LFP_{W,w}\varphi$ が成り立つ証拠が, 無限木になることがある．

全称記号 \forall が, $LFP_{W,w}$ の内側に現れなければ, 成り立つ証拠は, 有限木になる．

⇒ 無交代様相 μ 計算と同様に充足可能性が判定できる．

BDD による実装

- 充足可能性決定手続きは、集合演算のみでできている。
- two-way CTL と同様に BDD による実装が可能と考えられる。
- 部分的な実装例 1: 無交代様相 μ 計算充足可能性判定の変形: 有限 2 分木モデルの存在判定
- 部分的な実装例 2: 無全称無交代 μ GF 充足可能性判定の小さなプロトタイプ: LFP 展開式を 1 つに固定して実装。

実装例 1:

論理記号数	610	1806	817	4141	4141
BDD ノード数	322	2164	774	4626	30523
実行時間 (ミリ秒)	20	1036	88	120	784

実装例 2:

n	5	10	15
BDD ノード数	27872	83499	205079
実行時間 (ミリ秒)	1382	4557	19428

まとめ

BDD による実装が可能になる，タブロー法による充足可能性判定手続きを，以下の体系について与えた．

- 無交代 2 方向様相 μ 計算
- 無交代無全称 μ LGF

課題:

- 本アルゴリズムの実装
- 効率の良い実装のための，アルゴリズムの改良．
 - ループ排除の効率化，など
- 「無全称」の制限を外した，無交代 μ LGF の充足可能性判定手続きの考案．